

論文

一八七〇年代およびそれ以後の恐慌についての

マルクス、エンゲルスの見解

三宅義夫

まえがき

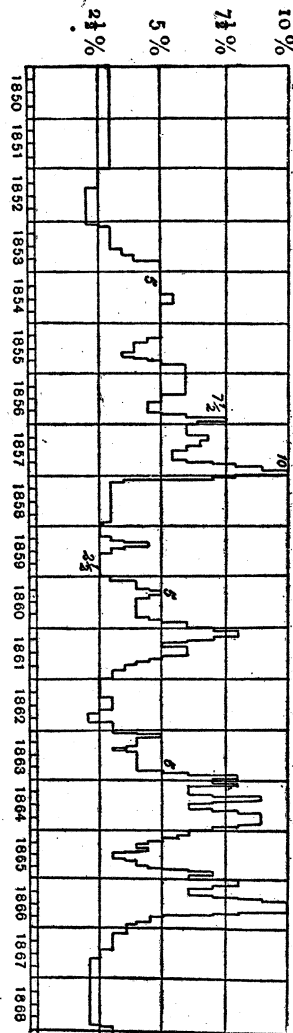
本稿で考察しようと試みていることは、一八六六年恐慌のち、一八七〇年代およびそれ以後の時期の恐慌について（ならびにこの時期に恐慌について）、マルクスおよびエンゲルスが、どのように述べているかということである。さきに私は一八四七年恐慌について、『資本論』第三部第五篇のなかで敘述され、引用されているものを一八四七年恐慌という角度から関連づけることを試みてみた。これは直接には第五篇での信用論の解明に資することを目的としていたものであったが、それはまた同時に、一八四七年恐慌についてマルクス（およびエンゲルス）がどういうことを述べているか、ということを見ようとしたものでもあった。つまり右の論稿は、いわば二つの脚を持っていたのである。この後の脚の方は、一八五七年恐慌以下の諸恐慌についての同様な試みにつながっている。そして本稿は、この

一連の試みのうち、時期的に最後の部分をなしているものである。

従来、この時期のマルクス、エンゲルスの諸見解についての研究は、まったく意外なほどなおざりにされている。しかし時期からいってこの時期は今日にもっとも近いという、たんにそればかりでなく、この時期には今日にもっとも近いいくつかの問題が問題とされているのであって、ここでのマルクス、エンゲルスの見解を見ることは、この兩人の口からただ恐慌の歴史について聞くということにとどまるものではない。そしてここで述べられていることの中には、恐慌の理論的研究にとって、恐慌の発現形態が時代によって変容するという問題のほか、私としては、より本質的に重要な問題も若干伏在しているように考えられる。だが本稿はこうした問題をとり出して、直接それを論じようとしているものではなく、それを今後の課題として、ここではそのための順序として、マルクス、エンゲルスが一体どういうことをいっているかということ、できるだけ正確に調べてみることを目的としている。

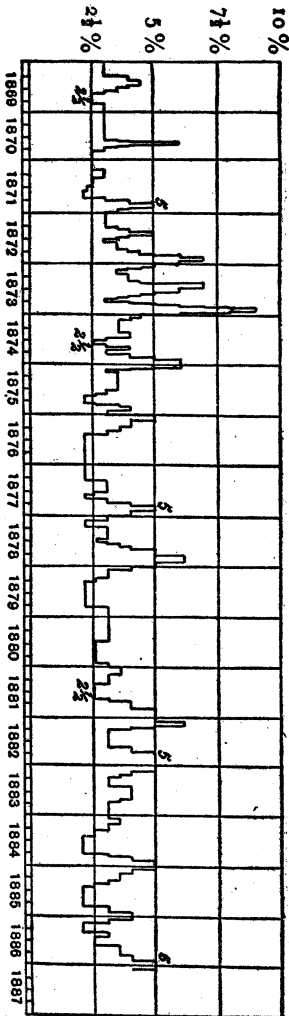
以下でとり上げるマルクスの記述は、一八七三年一月から一八八一年十二月まで、エンゲルスの記述は、一八七三年五月が一つ入るが、それ以外は一八八二年一月から一八九四年十月にいたるまでであって、したがって計約二十年間にわたっている。なお、この時期については、エンゲルスが一八七〇年九月にロンドンに転居し、それはマルクスの住居から歩いて十分位のところであったので、往復書簡が利用できない。したがって材料はかなり制約される。その上、以下挙げるものがこの期間兩人が恐慌について述べている既発表のものをすべて網羅しているとは、いいえない。いずれも手元にあるマルクス、エンゲルスのもののなかから、記憶と見当づけとでとり上げたにとどまるからである。しかし、ほぼ主要なものは拾ったはずと思われる。原文を参照しえないものも若干あるが、その旨記して入れておいた。なお、ギルバートやクラバム等の書から引いてあるのは、マルクス、エンゲルスの記述をなるべく十分に

読みとるための、事実の説明としてあるいは参考としてであって、これらの書によって事実についての判断を求めようとしているものではまったくない。



Bank of England minimum Rate of Discount, 1850-68.

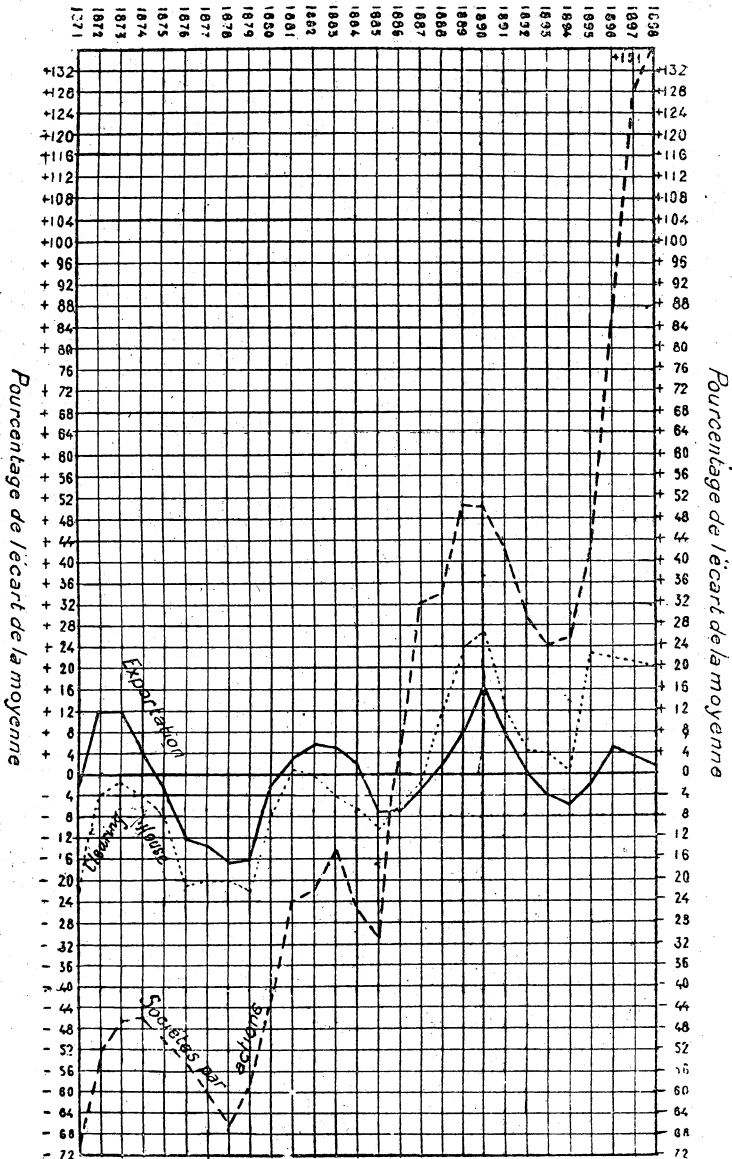
第一



Bank of England minimum Rate of Discount, 1869-86.

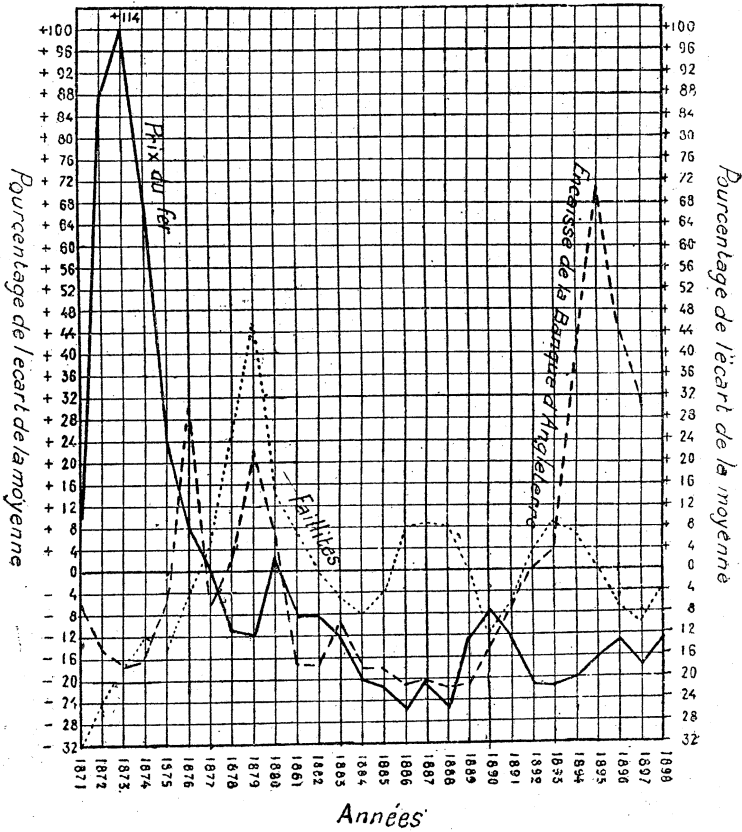
第二図

Années



一八七〇年代およびそれ以後の恐慌についてのマルクス、エンゲルスの見解

第三圖



一八七〇年代およびそれ以後の恐慌についてのマルクス、エンゲルスの見解

はじめに三つの図を掲げておく。第一図はクラパム(J. Clapham)の *An Economic History of Modern Britain*, vol. I, 1952, p. 363. 所載のイングランド銀行のバンク・レート(一八五〇—一八六九—一八六六年)。第二図はトゥガン・バラノウスキー (Tougan-Baranovsky) の *Le Crises industrielles en Angleterre*, 1913, p. 140 (鎌本博訳『英国恐慌史論』、一四三ページ。なおロシア語版が出たのは一八九四年) 所載の連合王国輸出額、ロンドン手形交換所交換高、株式会社設立数にかんするもの、第三図は同じく P. 141 (同上訳、一四四ページ) 所載のスコットランド鉄鉄の価格、イングランドおよびウェールズの破産および支払停止数、イングランド銀行正貨保有高にかんするもの、ともに一八七一一八八八年、図は平均値からの偏差(ただし、平均値の算出は、株式会社設立数については一八七一一八三年の平均、破産数については七一一八三年の平均と八四一九八年の平均の二つがとられている)。

—

『資本論』第一巻のドイツ語版第二版は一八七二年から七三年にかけて、第一版のときとちがってははじめ分冊の形で刊行されたのであるが、その「あとがき」の最後のところでマルクスはつぎのように述べている。この「あとがき」の日付は一八七三年一月二十四日である。

「資本制社会の矛盾にみちた運動は、実務的なブルジョアにとっては、近代の産業が通過する週期的循環の浮沈においてもっとも痛切に感ぜられるのであって、この浮沈の頂点は、——「一般的恐慌 (allgemeine Krise) である。この「一般的恐慌は、まだ前段階に (in den Vorstadien) あるとはいえず、たゞ進行中 (im Annarsch) なのであって、その舞台の全面性ならびにその作用の強さにより、神聖プロシア・ドイツ新帝国の成金たちにさえ弁証法をたたき込

むであらう。』(インスティトゥート版、Bd. I, S. 18, 長谷部訳、青木版八七ページ、傍点―三宅)。

この「あとがき」は、一八七五年四月二十八日の日付をもつ『資本論』第一巻のフランス語版への「あとがき」に再録されたが、そのさいマルクスはここにつきぎのような註をつけ加えた(長谷部氏の訳註による)。「第二ドイツ語版へのあとがきは一八七三年一月二十四日付であり、その公刊ののちいくばくもなく、そこで、予言された恐慌が、オーストリア、合衆国およびドイツにおいて勃発した。多くの人々は、一般的恐慌は激烈な、しかし部分的な、これらの爆発によって、いわばあらかじめ消耗しつくされたものと誤信している。だがそれどころか、恐慌はその頂点に向っている。イギリスは中心的爆発の座となり、その影響は世界市場において感ぜられるであらう」(長谷部訳、前掲青木版八七ページ、傍点―三宅)。なお、このフランス語版は一八七二年から分冊の形でパリで刊行され、この一八七五年春に完結したのである。

マルクスはさらに、一八七八年十一月十五日付ダニエルソン(Danielson)宛の手紙のなかでこの「あとがき」についてつぎのように述べている。¹⁾「フランス語版三五四頁の註で私が予告したイギリスの恐慌は、ついに最近数週の間、勃発しました(a enfin éclaté pendant les dernières semaines)。友人たち——理論家と事業家——はこの註をとり除くことを私に求めました。この註はかれらには根拠が不十分のように思えたからです。それほどかれらは、南北アメリカ、ドイツおよびオーストリアでの恐慌がイギリスの恐慌をいわば『割引する(escompter)』にちがいないと確信していたのです」²⁾「傍点―三宅。Briefe über „Das Kapital“, S. 238—9, 岡崎次郎訳、下巻、二八七ページ)。ここに、友人たちが南北アメリカ、ドイツ、オーストリアでの恐慌がイギリスの恐慌を「割引する」にちがいないと信じていたといっているのが、さきのフランス語版のなかで、多くの人々は一般的恐慌は「激烈な、しかし部分的な、これら

の爆発」によってあらかじめ消耗しつくされたものと誤信していると記していることと相応していることは、指摘するまでもないであろう。

以上三つの記述を綜合してみると、マルクスは一八七三年一月当時「一般的恐慌」が「まだ前段階にあるとはいえず、ふたたび進行中」だと告げ、これから約二年三ヵ月のちの一八七五年四月に、さきに告げた恐慌が、オーストリア、合衆国、ドイツにおいて「勃発」したとし、これらはなお「部分的」なものであるが、恐慌は「その頂点に向っている」、そこではイギリスが「中心的爆発の座」となると予測し、ついでこれからさらに約三年半のちの一八七八年十一月——はじめに第二ドイツ語版で「一般的恐慌」が「進行中」だと記してから数えるところの間約五年十ヵ月を経ている——、「イギリスの恐慌はついに最近数週の間には勃発しました」と述べていることになる。一八七〇年代の景気変動の過程は、それ以前とくらべるといちじるしく異なつた。一八四七年、五七年、六六年と恐慌を経験してきたマルクスは、ここにはじめて様相のちがつた事態にぶつかったわけである。しかし右のマルクスの語調から見ると、大局的にいって予測は的中したと考へていた、と見受けられる。マルクスは従来の恐慌のような「頂点」の到来を待ち受けていたのであり、この従来の「頂点」はロンドン金融市場のパニック——イングリランド銀行の一八四四年条例の停止であつた。一八七三年は普通、イギリスについても恐慌の年として挙げられており、あるいはまた一八七五年も挙げられているのであるが、右でこれらを見送っているのは、十分な回復が見られなかつたこととともに、マルクスはより大きな「爆発」を信じ、これを待っていたからであらうと考へられる。事実、イギリスにとって一八七八年の恐慌は七三年、七五年より事態は深刻であつた。そしてこの七八―九九年が当時のイギリスの産業循環において、一八七三年から辿つた下降線の底であり、ここからまた上向をとつた。前掲第二図、第三図の、とくに「輸出」および

「破産」の線を見られたい。またJ・クラブムはつぎのように記している、——「イギリスは、多くの商工業国が一八七三年に通らなければならなかったところの、恐慌の過激な局面ならびにパニックを免れた。(しかしイギリスは、一八七八年にその延期された勘定を支払わなければならなかった)」と(J. Clapham: *An Economic History of Modern Britain*, vol. I, p. 379)。だが、さきのような「頂点」はこの一八七八年にも——その後においても——とうとう来なかった。

アメリカでは南北戦争(一八六一年—)が一八六五年に終り、プロシアは普墺戦争(一八六六年)を経て一八七〇年の普仏戦争によってドイツ帝国の統一を完成した。以後この両国における資本主義の発展には目ざましいものがあった。統一が成り、かつフランスから多額の賠償金を手に入れてこれがばら撒かれたために、ドイツにおいてはげしい企業熱が勃興し、これが他の西欧——フランスを除いて——に拡がって行った。さきの「神聖プロシア・ドイツ新帝国の成金たち」というのは、当時のドイツにおけるこうした事情からいわれているのである。アメリカでは鉄道建設が大に行われ、鉄道投機が生じた。このように当時繁栄はドイツ、アメリカが中心であった。この繁栄に続いた恐慌は、したがってこの両国においてとくに強く生じた。まず一八七三年五月にオーストリアにおいて、また同年九月にアメリカにおいて、この繁栄の崩壊——恐慌が起きた。ところで、さきの一八七三年一月二十四日付の記述で「一般的恐慌はまだ前段階にあるとはいえふたび進行中」とマルクスが記しているのは、なにによってこう判断したのか明らかなでないが、一八七二年十月三日にイングランド銀行は公定歩合を四 $\frac{1}{2}$ %から五%に引上げ、同月十日さらにこれを六%とし、十一月九日には七%に引上げた(J. Clapham: *The Bank of England*, vol. I, p. 282, 430)。かねてからマルクスが景気変動の觀察に當ってこのイングランド銀行のバンク・レートの動きに多大の関心を払っていたことを

顧慮すると、右の判断はおそらくこの動きを指標の一つとしたものであろうかと思われる。ちなみに、七%に引上げられたのは一八六六年以来のことであった。だがこれは一時的なものにとどまり、十二月十二日には五%に戻り、翌一八七三年一月末までに半分の三 $\frac{1}{2}$ %に引下げられて行った (Clapham: *ibid.* p. 293, 430)。

一八七八年十一月十五日付の手紙で「イギリスの恐慌は、ついに最近数週の間には勃発しました」といっているのは、シティ・オヴ・グラスゴー・バンク (City of Glasgow Bank) の倒産を見ていったものと思われる。同行は一八七八年十月二日に支払不能に陥った。この倒産は一八七八年におけるもっとも大きな出来事であり、またこの恐慌を特徴づけたものであった。「恐慌の激烈な段階はほぼ十月末には終りを告げたといえるであろうといえ、これが完全にすぎ去るにはあまりに多くの不穏な噂がこの期ののちにも乱れ飛んでいた」(J. W. Gilbert: *The History, Principles and Practice of Banking*, new ed. 1922, vol. I. p. 392)。十二月九日にはプリストルのウェスト・オヴ・イングランド・バンク (West of England Bank) が倒産した。そしてこののちにも翌一八七九年のはじめまでにいくつかの銀行が倒産したが、一八七九年二月四日の「Vivian and Co., of Helstone〔銀行業者〕」の倒産をもって、一八七八年の恐慌はすぎ去ったといえるであろう。コンフィデンスはこのあとすぐに十分に回復した」(Gilbert: *ibid.* p. 396)。もっともこれはとくに金融市場についてであって、一般の商工業界はなお一八七九年が底であったと見受けられる。

一八七八年恐慌についてはあとでまた見るが、ここでイギリスにおける一八七三年の状況について瞥見しておこう。既述のように一八七三年五月にオーストリアで恐慌が勃発した。イングランド銀行はこれによる金の流出にたいして公定歩合を五月七日に四 $\frac{1}{2}$ %に、同月十日に五%に、十七日に六%に、六月四日に七%に、と引上げて行った。こ

れが同年の第一段階であつて、つぎの第二段階は九月のアメリカにおける恐慌勃発によつてはじまつた。イングラント銀行はふたたび金の流出に見舞われ、同行はこの金流出を防衛するためにふたたびつぎのように公定歩合を引上げ行つた。公定歩合は第一段階の鎮静とともに引下げられ、八月二十一日以来は三%に下つていたが、九月二十五日四%、二十九日五%、十月十四日六%、十八日七%、十一月一日八%、七日九%と相ついで引上げられた (Clapham: *ibid.* p. 430, Gilbart: *ibid.* p. 356)。「これらのレートはついに望まれていた効果を生じた。これらのレートはアメリカへの金の一層の流出をストップさせたばかりでなく、大陸、オーストラリア、およびインドから金を引き寄せ、かくしてイングラント銀行の金属準備勘定は十一月二十二日にふたたび増加を示した。ほぼ十二月のはじめ頃、恐慌はすぎ去りはじめた」(Gilbart: *ibid.* p. 356, 傍点—三宅)。「株式取引所では、十一月六日、七日はパニックの日であつた、——だがコンソルはわずかに二ポイント動いただけであつた」(Clapham: *ibid.* — *Economic History* —, p. 383)。右の九%レートはこの株式取引所パニックの二日目に採られたわけであり、一八五七年恐慌、一八六六年恐慌のさいには一〇%にまで上つたのであるが、この「一〇%という真のパニック・レートには達しなかつた」(Clapham: *ibid.* p. 383)。「一瞬、イングラント銀行条例の停止が危ぶまれた。だが、週報によると銀行部の準備〔銀行部の保有銀行券〕は八百万ポンド以下に下つたことはなく、発券部の保有金も千八百万ポンド以下に下つたことはなかつたのであるから、この危機は理由のないものであつた」(Clapham: *ibid.* p. 383)。株式取引所パニックは生じたが「しかし、なんら一般的な金融パニックは存しなかつた」(Clapham: *ibid.* — *Bank of England* —, p. 294)。公定歩合は、十一月二十日には八%、その一週間後には六%、さらにその一週間後には五%と低落して行つた。ちなみに、この一八七三年の右の動きののちには、一九一四年の第一次世界戦争勃発までの間、同行の公定歩合がふたたびこのような高さに上つたことは

なかった。九%も八%も現われず、七%になったのもわずかに一度、一九〇七年十一月七日から同年末までの間にそうであったにすぎなかった (Clapham: *ibid.* p. 430—2)。

- (1) ダニエルソン宛の手紙はたいいてい英文で、時にフランス文、ドイツ文をまじえて書かれている。Marx-Engels, Briefe über „Das Kapital“, besorgt von M.-E.-L.-S. Institut, Dietz, 1954. では、収録されているものについては原文とそれぞれのドイツ語訳とが併せ掲げられている。マルクス、エンゲルスがダニエルソンに宛てた手紙は以前に、Die Briefe von Karl Marx und Friedrich Engels an Danielson (Nikolaïon), herausgegeben von Kurt Mandelbaum, Neudrucke marxistischer Seitenheften, III, Verlag von Rudolf Liebing (L. Franz & Co.), Leipzig, 1929. としドイツ語に翻訳されて出版されているが、M.-E.-L.-S. 研究所のドイツ語訳は大体において——改訂しているところもあるが——このドイツ語訳と同じである。なお、同じくインスティトゥート編の Marx-Engels, Ausgewählte Briefe, Dietz, 1953. のなかにもダニエルソン宛の手紙がいくつか収められており、ここでも原文とドイツ語訳とが併せ掲げられている。Briefe über „Das Kapital“ と共通している手紙について見ると、ドイツ語訳は両者同じである。本稿では Briefe über „Das Kapital“ に収められているものには同書の手紙を記し、これに収められていないが Ausgewählte Briefe には入っている場合にだけ Ausgewählte Briefe のページを記しておく。ところで、以下に必要なダニエルソン宛の手紙のうち、この両書に収められていないものがある。これらについてはさきの Mandelbaum 編のドイツ語訳のページを記しておく。なお、Briefe über „Das Kapital“ には岡崎次郎訳『資本論に関する手紙』(法政大学出版局、昭和三十年、上下二冊)がある。また改造社版『マルクス・エンゲルス全集』第二十一巻(昭和六年)所収の「ダニエルソン宛の手紙」(鹿島昂訳)は上の Mandelbaum 編の書の訳である。本稿ではさきのページと併せて、Briefe über „Das Kapital“ に収められているものには岡崎訳の、その他のものには改造社全集版の訳の当該ページを記しておくこととする。

- (2) これについてマルクスは北アメリカ合衆国についてつぎのように述べている。「事業が上向線を辿るであろう第一の国は、北アメリカ合衆国です。ただ、諸条件が——悪い方——にまったく変わったならば、昂揚はやむでしょう。民衆は、工業、商業、土地所有、鉄道、および金融を支配しつつある——内乱の勃発以来ますます急速度で——大会社の独占力や有害な(大衆

の直接の幸福にかんずるかぎりでは）影響からまぬかれようと試みても無駄でありましょう。最良のヤンキー著述家たちは、反奴隷戦争はなるほど黒人の鎖は断つたが、そのかわりに白人の生産者たちを奴隷化したという厳然たる事実を、声高く断言しています。——経済学者たちにとつてもつとも興味のある領域は、いまや疑いもなく合衆国に、そしてなかんづく、一八七三年（九月の崩壊以後から）一八七八年にいたる時期——慢性的恐慌の時期（the period of chronic crisis）——に、横たわっています。変革（transformations）——その遂行にイギリスでは数世紀を要したが——ここではわずかな年月で実現されました。しかし観察者は、大西洋岸のより古い諸州ではなく、よりあたらしい諸州（オハイオはその一適例）ならば最新の諸州（たとえばカリフォルニア）に目を向けるべきです」（Briefe über „das Kapital“, S. 238—40, 岡崎訳、下巻、二八七ページ）

二

さきに挙げた一八七八年十一月十五日付ダニエルソン宛の手紙での「イギリスの恐慌」についてのマルクスの記述は、その後同じくダニエルソン宛の手紙でこれについてマルクスが書いているところと直接に相関連して考察されねばならないのであるが、これらのその後の手紙を見る前に、——本稿はなるべく書かれた年月の順序を追って見てゆくこととしているので、——一八七三年五月三十一日付エンゲルス宛のマルクスの手紙および『資本論』第一巻のフランス語版に書加えられたマルクスの一つの記述（一八七五年——推定——）を見ておくこととする。

マルクスは一八七三年五月三十一日付エンゲルス宛の手紙のなかでつぎのように述べている。

「長い間ひそかに僕が取組んでいた件を、ここでムーアに話してみた。だが彼はいう、問題は解けない、またはすくなくとも、それには多数の、しかも大部分はこれからはじめて見出されるべき要因が入ってくるので、目下のところ

ろでは解けない、と。事柄はこうだ。君も知るように、物価、割引率、等々の年間の運動などが、上下するジグザクの形で表わされている表がある。僕はこれまで何度も——恐慌の分析のために——不規則な曲線をなすこの上下運動を計算しようと試みた。そして、そこから恐慌の主要諸法則を数学的に確定しよう (die Hauptgesetze der Krisen mathematisch zu bestimmen) と思った (いまでも、十分に選別された材料をもってすればそれは可能だと思っている)。ムーアは、いまいったように、この問題はしばらくは解けないとしている。それで僕は当分はそれを断念することにした」(Briefe über „Das Kapital“, S. 221, 岡崎訳、下巻、二六六—七頁)。

この手紙は時期としては、オーストリアで一八七三年恐慌が起きた当時に書かれているわけである。「恐慌の主要諸法則を数学的に確定する」ということは、一見したところ、事の当然としてそもそもできない相談のように思われるのであるが、どういうわけでマルクスがこうしたことが「可能」だと考えていたのか十分には明らかでない。だがいろいろ調べてみると、大分前のことであるが一八五七年恐慌当時、マルクスはつぎのようなことを述べているのであって、右の手紙はこういうことと関連があるように思われる。

第一——ここでも記述を年月の順序で紹介しておく——。一八五七年十一月十三日付エンゲルス宛の手紙でマルクスはつぎのようにいっている。——「僕自身は大いに金融逼迫しているが (in financial distress) 一八四九年このかた、この勃発 (outbreak) のさいほどいい気持になったことはない。……事態の全貌がわれわれの眼前にあるいま、僕は『トリビュン』の基礎的な一論説のなかで、しかも一八四八年から一八五四年「？」までの割引率のたんなる表によつてさえ、恐慌は普通なら二年前にやつてきたはずだ、たという、ことを論証した。その遅れたこともいま非常に合理的に説明がつくこと、ヘーゲルすら「概念」(Begriff) を「有限な Interessen の世界の経験的系列」におい

てふたび発見して満足だったろうけど」(Marx-Engels, Briefwechsel, herausgegeben vom M.-E.-L. Institut, Moskau, Bd. I, S. 297, 改造社全集版訳、第十八巻、一二八ページ、傍点および「」内一三宅)。

ここでいっている『トリビュン』の「一論説」というのは、同年十一月三十日号掲載の「イギリス商業の激動」(大月書店刊『マルクス・エンゲルス選集』第九巻上、三九一四八ページに収められている)のことと思われる。マルクスはこの論説のなかで、一八五七年恐慌に当たっての十月から十一月の割引歩合の引上げと一八四七年恐慌のさいの四月から十二月にいたる割引歩合の動きとを対比したのち、ついで一八四八年以来の割引歩合の動きをあとづけ、一八五二年六月二十六日までの五カ年間は「不断の引下げの時期」をなし、一八五七年にいたるつぎの五カ年間は「逆の運動」とったとし(前掲第一図参照)、さらに「より詳細に考察すると」として、この「後半」の時期の動きをつぎのように記している。——一八四七年には四月十日に割引歩合は五%となり、このときすでに恐慌がはじめていたが、右の「後半期」にはすでに一八五四年五月六日に五 $\frac{1}{2}$ %に達したがそれからふたたび下って行った、この低下は五五年六—九月を底として十月二十日には短期手形にたいし六%、長期手形にたいし七%に引上げられた、だがまた反動がきたがふたたび五六年十一月十五日には七%に達した、その後若干の低下、不規則的変動があったがアメリカの恐慌が響いてきた五七年十月十二日に七%に達し、それからまっしぐらに上昇した、と³⁾。このように、割引歩合の変動は一八四八—五七年の間の「後半」には「次第に短い間隔」で生じるようになり、また一八四四—四七年は三—四%という「比較的安い信用の時期」であったにたいし一八五五年十月—五七年十月の二カ年は「貨幣の価値が高く」五 $\frac{1}{2}$ —七%の間を上下していた。同時に生産と交換とは一路増大をつづけた。

マルクスはこう考察を進めてき、そこでこれを説明してつぎのように述べている。すなわち、一方ではこの「例外

的な現象」はオーストラリアとアメリカ合衆国から折よく「金が流入してきたことに原因」があり、そのためイングランド銀行はその条件を時折「緩和」することができたのである。他方では、「恐慌はすでに一八五五年、一八八五年とあるが誤植であろう」十月に到来しなければならぬところであつたこと、それがひきのばされたのはいくたの一次的な詭計によるものであること、そしてその結果、恐慌の最後の爆発は兆候の激烈さの点でもその伝染性の度合の点でも、従前のあらゆる恐慌を凌駕するにちがいないことは明らかである。割引歩合が週期的に七%に立戻るといふ興味ある事実は一八五五年十月二十日、一八五六年十一月四日（前記とちがう。誤植であろう）、一八五七年十月十二日に見られたことであるが、この事実はたつたいま述べた命題の正しさの十分に決定的な証拠として役立ちうるであろう。このことは、われわれが、以上の事実のほかに、すでに一八五四年にイギリスがその国を捉えた破局という形で警告を受けたことや、ヨーロッパ大陸ではパニックのあらゆる現われが一八五五年と一八五六年との十月にすでにくり返えされたということを知らなくとも、いえることである」（傍点および「」内三宅）と。そして、この「一時的事情」を抜きにして考えれば、「一般に一八四八年乃至一八五七年の時期は、一八二六年乃至一八三六年、および一八三七年乃至一八四七年の時期に、驚くほど似ている」と。

マルクスはこの論説のなかで、「割引歩合の変動は現代商業の週期的局面に伴う平凡な一現象である」とし、高い割引歩合は「恐慌年度における信用の極度の縮小を意味し、信用はその後次第に拡張され、割引歩合が最低点に引下げられるときにその最大限に達する。そのときふたたび逆の運動がはじまる。すなわち、信用は次第に縮小され、割引歩合が最高に達するとき最高点に達し、そしてふたたび恐慌年度がやってくる」といつている。一般的、法的にはこういうものである。しかしそこから進んで、右のように割引率の上下をあとづけることによって恐慌の到来を

判断するということには、——一八五七年恐慌のさいには燭眼的に作用したとしても——それはどの程度までいいうることであるか、あるいは一般に妥当であるかどうか、かなり問題があるように思われる。しかし事の当否を論じることとは本稿の範囲外のことであるから、つづいてつぎを見よう。

第二。これは事柄自体は右の第一に掲げた手紙や論説が書かれた前のことであるが、マルクスが述べている日付としては右のあとの、同年十二月八日付の手紙のなかで、マルクスはつぎのようなことをエンゲルスに告げている。——『トリビュン』で僕は一つの満足を味わった。十一月六日には、僕は一八四四年の銀行条例を論じた『トリビュン』への一論説のなかで、停止の茶番が二三日中に現われるであろう。だがあまり大きな騒ぎはこの金融パニックからは生じない、本当の事件は目前に迫っている産業上の崩壊(industrial crash)である、と書いた。『トリビュン』はそれを社説として印刷した。『ニューヨーク・タイムス』(これは『ロンドン・タイムス』と封建的關係に立っている)は三日後『トリビュン』に答えて、第一にイングランド銀行は条例停止をしないであろうといい、条例をプリンティング・ハウス・スクエア「タイムスの建物がある場所」の金融記者の云い方で賞め上げ、『産業上の崩壊』という妄語はイギリスでは『まったく馬鹿々々しい』と断言した。それをタイムスが云ったのは、二十四日のことであった。その翌日、タイムスは大西洋の電信によって、イングランド銀行が条例を停止したという報道、ならびに同時に産業上の窮迫についての諸報道を知ったのであった」(Marx-Engels, Briefwechsel, Bd. I, S. 312, 改造社全集版訳、第十八卷、一三八—九ページ)⁴⁵⁾

これは、これだけをとり出して見れば一つの挿話たるにすぎないが、しかし一連の関連において見ると、このように予想が当たったこと——これは当時の情勢から見てそう不思議はないことであるが——も、さきの「恐慌の主要諸法

則を数学的に確定する」といった考え方になんらかの影響を及ぼしたのではなからうかと推察される。なお、右で「二十四日」と記されているのは、なにかのまちがいであろう。一八五七年恐慌のさい銀行条例が停止されたのは、十一月十二日、木曜日であったから、右は「十一日」でないと——また「三日後」も五日後でないと——話が合わない。

第三。かくしてマルクスはまた、この翌年一八五八年十月四日号の『ニューヨーク・ディリー・トリビューン』紙上の論説「イギリスの商業と金融」のなかで、つぎのように述べている。——「最近の議会報告書や、同じくまた『一八

四七年の恐慌にかんする報告書』およびその後に発表されたすべて類似の諸報告書を通じての本質的欠陥は、まさしくつぎの点にある、とわれわれは見る。すなわち、これらの報告書が、それぞれのあらたな恐慌を、社会の地平線上にはじめて生じるところの、したがってまた、二つの激動の中間の時期にとってまったく例外的かつ独特な（もしくはそのように見える）もろもろの事件、運動および要因によって説明されるところの、孤立した現象として取扱っていることである。もしも自然科学者たちが、こんな子供じみた判断をしたとしたら、慧星の出現でさえ世界にとって不意打ちということになるであらう。世界市場の恐慌を左右する諸法則を明らかにしようとする場合、恐慌の週期的性質についてばかりでなく、またこの週期性の正確な日どりについても説明を与えることが必要である。のみならず、それぞれのあらたな商業恐慌に固有な諸特徴によって恐慌全部に特有な特質がばかされてはならない」（前掲『選集』第九卷上、七二—三ページ、傍点—三宅）。

恐慌を、まだ当時一般に、資本主義にとって偶然的な、外的なものとして見ていた見方にたいして、これを内的なものであり、週期的にかかる事象が生ぜざるをえないとしたマルクスにとっては、つぎにかかる週期性の法則をより正確に確定したい、と考えたであろうことは想像にかたくない。右の「週期性の正確な日どり」というのはどういふ語の

訳か原文を見ていないので明らかでないが（この大月書店刊『選集』第九卷（上）の『トリビュン』論説の訳はいずれもロシア語訳によっているはずであるが、このロシア語訳も未見）、意味はおそらく週期の正確な進行プロセスといったほどの意味であろう。そして——これもおそらくであるが——、さきに第一のところで見たとような分析を通じて、正確なプロセスをそこから抽出しうるとマルクスは当時考えてこういつていたのではなからうか、と思われる。

一八五七年恐慌については改めて別稿で見るが、ともかく、さきの一八七三年五月三十一日付の手紙でいっていることは、一八五七年恐慌当時、マルクスが上記のことを考え、上記のようなことを経験したことから、尾を引いていたのではなからうか、と考えられるのである。

(3) 前掲 J・クラバムの *The Bank of England, vol. I*, 巻末の「バンク・レート」の表 (p. 429) によると、一八四七年十月二十五日（イングランド銀行条例を停止した日）に 8% に引上げた後、一八五七年十一月九日（銀行条例を停止したのは十二日）にいたる間の動きは、つぎのようにしるされている（日付は改訂の日）。

年	月	日	%
1847	11	22	7
	12	2	6
1848	"	23	5
	1	27	4
	6	15	3 1/2
1849	11	2	3
1850	"	22	3 1/2
1852	12	26	3
	1	1	2 1/2
1853	4	22	2
	1	6	2 1/2
	"	20	3
	6	2	3 1/2
	9	1	4
	"	15	4 1/2
1854	5	29	5
	8	11	5 1/2
1855	4	3	5
	5	5	4 1/2
	6	3	4
	9	14	3 1/2
	"	6	4
	"	13	4 1/2
	10	27	5
1856	"	4	5 1/2
	5	18	6 or 7*
	"	22	6
	6	29	5
	10	26	4 1/2
	"	1	5
	"	6	6 or 7*
	11	13	7
	12	4	6 1/2
1857	"	18	6
	4	2	6 1/2
	6	18	6
	7	16	5 1/2
	10	8	6
	"	12	7
	"	19	8
	11	5	9
	"	9	10
	(12	24	8)

* 印の 6% は 60 日物

見られるように、マルクスが記している日付とこれらとの間には若干のずれがある。クラバムの右の表の方が正しいとすれ

ば、上掲のマルクスの記述の日付は多少改訂を要するが、しかしもちろん動きとしては両者一致している。なお前掲の、同じクラバムの別著 *An Economic History of Modern Britain, vol. I.* 所掲のバンク・レートと対比して見ると、図の方では、イングランド銀行が公表ミニマム・レートとして短期物と長期物とを区別しているさい、短期物のレートだけを記入しているようである。したがって、マルクスが指摘している「週期的に七%に立戻るといふ興味ある事実」は、この図ではわからない。他方また、この図では一八五六年末に七 $\frac{1}{2}$ %に上げたように記入されているが、これは右表とも合わない。おそらく図の書きそこねであろう。

(4) ここでいっている一八五七年十一月六日の「一八四四年の銀行条例を論じたトリビュンへの一論説」は、前掲大月書店刊『マルクス・エンゲルス選集』第九巻(上)の『トリビュン』の諸論説——これはこの期の『トリビュン』所載のマルクスの同種の論説を編集したもの(この編集の仕方はあまり良くない)を邦訳したもの——のなかに、収められていない。しかしそこに収められている前掲の一八五七年十一月三十日号掲載の「イギリス商業の激動」のはじめのところで、「われわれがさきの論説の一つで「さきの一論説で?—三宅」予想したとおり、政府は一八四四年のイングランド銀行条例を結局は停止しなければならなかった」(『選集』第九巻上、三九ページ)と述べているこの「論説」が、右の十一月六日の論説であつたのであろう。また同じくそこで、「イギリスの商業が際会している激動の全範囲について、三つの特殊な形態を区別することができる」として「ロンドンとリヴァプールにおける金融および商品市場の伸縮み状態」と「スコットランドにおける銀行パニック」と「工場諸地方における工業の破局」とを挙げ、「これについての諸事実はイギリスの新聞からの多数の抜書という形で金曜日の本紙上で詳細に述べられた」と記しているが(同上訳書、三九ページ)、これも右の十一月六日の論説を指しているものであろう。銀行条例が停止された十一月十二日は木曜日であつたから、これから逆算すると「十一月六日」は「金曜日」であつたことになる。この十一月三十日号の論説でもこれにひきつづいて、恐慌の状況を右の「三つ」に分けて描出している。

なお、この予想が当って愉快だったというマルクスの手紙にたいして、エンゲルスは同一八五七年十二月十七日付の手紙で、「銀行条例にかんする予告、おめでとう」と述べている。

(5) この一八五七年十二月八日付の手紙の終りの方でマルクスはつぎのように記している、——「大洪水の前に、すくなくとも綱要(die Grundrisse)を明らかにしようと思つて、僕は僕の経済学の研究をまとめるのに夜中気がいふようになって仕事している」と。そして十二月十八日付エンゲルス宛の手紙では、「僕はまったくものすごく仕事している、たいいていは朝の

四時まで。仕事はくわしくいえば二つある。第一は「経済学綱要 (Grundzüge der Oekonomie)」の仕上げ。……第二は、現在の恐慌。これについては、『トリビュン』への論説を別とすれば——ただ帳付けをするだけだが、これがひどく時間をとる」と述べている。当時このように書いていた「綱要」がいわゆる『グランドリッシャ』のことであることは、いうまでもない。

(9) J. W. Gilbert: *ibid.* vol. I, p. 303. H. D. Macleod: *The Theory and Practice of Banking*, 2nd ed., vol. I, p. 153, J. Clapham: *The Bank of England*, vol. I, pp. 231—2, *Das Kapital*, Bd. III, S. 602.

(7) 一八五七年の初頭にイギリス下院に設けられた「銀行条例」委員会は同年七月三十日付で報告書を出したが、一八五七年恐慌が起きたのち同年末ふたたび下院に同委員会が設けられ、この委員会は翌一八五八年七月一日付で報告書を出した(拙稿「一八四七年恐慌」参照)。マルクスはこの一八五八年の委員会報告書を読んで『ニューヨーク・トリビュン』に「一八四四年のイングランド銀行条例の効力停止」(一八五八年八月二十三日号掲載)および「商業恐慌と貨幣流通」(同年八月二十八日号掲載)なる二つの論説を書いたが(この二つはともに、前掲『選集』第九卷(上)の一二三—九ページと六四—七〇ページとにそれぞれ収められている)、上記の「イギリスの商業と金融」はこれらにひきつづいて右報告書について書かれた第三の論説をなすものである。

三

マルクスは『資本論』第一巻のフランス語版において、とくに「資本の蓄積過程」の部分にかなりの手を加えたが、このさい「資本制蓄積の一般的法則」の章のなかの産業循環の週期性について触れているところに、かなり長い書加えを入れた(フランス語版は既述のように分冊で刊行され、この部分が出されたのは一八七五年と推定される⁸⁾)。すなわち、右の章のなかで、「一たび一定の運動に投げ入れられた天体がたえず同じ運動を反復するのとまったく同様に、社会的生産も、一たびかの交互的膨脹および収縮の運動に投げ入れられると、たえず同じ運動を反復する。結果がまた原

因となるのであって、自分自身の諸条件をたえず再生産する全過程の浮沈は、週期性の形態をとる」(ドイツ語版——インステイトゥート版、S. 667、長谷部訳、青木版九八二ページ、傍点原文のもの)として、「週期性」に触れている箇所のつぎに、つぎのような書加えを入れている。——

「しかし、はじめてつぎのような時代から、すなわち、機械制工業によって外国貿易が国内貿易を超越しはじめたとき、世界市場が新世界「アメリカのこと」において、アジアにおいて、またオーストラリアにおいて、継続的に拡張された諸地域を併合するにいたったとき、最後に、競争場裡に現われる工業的諸国民の数が十分に多くなるにいたったとき、——こうした時代からはじめて、かのたえずくり返して生み出される循環、その相ついで続く諸局面は数年にわたり、その結果はつねに一般的恐慌——これは一つの循環の結末をなし、かつあたらしい循環の出発点をなす——に終るところの循環、がはじまったのである。今日までのところでは、このような循環の週期的期間は十年または十一年であるが、しかしこの数を変えないものと見るべき理由はなんかない。反対に、われわれがさきに展開してきたような資本制生産の諸法則から、ひとは、その数は変動しうるものであること、また循環の週期ははたに短くなるであらうという、ことを結論しなければならぬ (muß man schließen, daß sie veränderlich ist, und daß die Periode der Zyklen sich stufenweise verkürzen wird.)」(インステイトゥート版、Bd. III, S. 1071、戦後のデューン新版、Bd. I, S. 963、傍点および「」内三宅)。なお右のドイツ文を入れたところはカウツキー版ではつぎのように訳われている。——geben uns die hier entwickelten Gesetze des Kapitalismus Grund, anzunehmen, diese Zahl sei veränderlich und werde sich allmählich verkleinern. (カウツキー版、Bd. I, S. 571)。

エンゲルスが編集した『資本論』第一巻のドイツ語第三版、第四版にはフランス語版でのマルクスの改訂と追加と

が、マルクスの残していた指示を参照して、とり入れられていることは、これらの版へのエンゲルスの序言に見られるとおりであるが、右の書加えは指示がなかったためであろうか、とり入れられていない。

右の書加えの前半のところは、それが挿入されているパラグラフの冒頭で、「人類の従来などの時代にも見られない近代的産業のかかる独自の生活経路〔そのすぐ前で述べている「十年目ごとの循環という形態」を指しているもの〕は、資本制生産の幼年期にもありえなかった」と述べていることと、結論的には同じであるが、しかし、そこではなぜ「幼年期」にはこうした循環が生じないかということと、「近代的産業の全運動形態は、労働者人口の一部分の、失業者または半失業者へのたえざる転化から発生する」という点から説明しているにとどまっているのにたいして（この節の表題は「相対的過剰人口または産業予備軍の累進的生産」であるから、このような説明で不思議はないが）、右の書加えは、かなり規模を広げた説明を——というよりも、正しくいえば、考慮に入れられるべき事柄についての示唆を、ここで与えているわけである。だが、いまとくに注意して読まれるべきことは、この書加えの後半で週期の期間について、「十年または十一年」といったものが固定的なものでないとしているにとどまらず、進んで「しだいに短くなるであろう」とし、しかもそれを「さきに展開してきたような資本制生産の諸法則から」そう考えるべきだと記していることであって、このことは、「諸法則」の理論的な解釈とかんれんして、また当時の経済の現実の動きとかんれんして、注目に値する。

ここで、この書加えと直接に関係があるように見受けられるマルクスのつぎの二つの記述を見ておこう。

一つは、同じくこの節のすこし後のところでつぎのように述べていることである。——「十年目ごとの循環とその週期的諸局面——これらはさらに、蓄積が進むにつれて、ますます急速に相いつづく不規則な諸動揺によつて交錯さ

れる (durchkreuzt werden) —— とを伴う近代的産業にとっては……」(インスティトゥート版、Bd. I, S. 671, 長谷部訳、青木版九八七ページ、傍点—三宅)。筆者は初版本もドイツ語第二版も見えていなく、加えて、エンゲルスは第四版では序言で改訂箇所を断わっているが、第三版ではそれもないので、この傍点箇所が追加されたものか、そうでないかわかりかねるのであるが、たとえばその数ページ前のところでマルクスはつぎのように述べている、——「近代的産業の特徴的な生活経路——中位の活気、高圧のもとの生産、恐慌、および沈滞の諸期間からなるところの・中途に小さい動揺がありはするが十年目ごとの・循環 (durch kleine Schwankungen unterbrochen zehnjährigen Zyklen) という形態は……」(S. 666, 同上訳、九八一ページ、傍点—三宅)。こうしたものとくらべてみると、右の記述は追加されたものかどうかは別として、内容の上からいって、あらたなものがつけ加えられている、と見られる。そして、ここできいていることは、さきのフランス語版への書加えとかんれんして、併せ考察されるべきものと考えられる。

一つは、一八七五年六月十八日付ラヴロフ (Lawrow) 宛の手紙。「商業恐慌は拡がりつつあります。いまではいっさいが、アジアの諸市場、とくにこの数年来たえず過充の度を増してきていたインドの西部諸市場からの報道にかかっています。決定的な崩壊 (Krach) はいくつかの条件によって遅らされるかもしれませんが、そんな条件もいまはないようです。／一般的恐慌の週期の短縮は真に注目に値します。私はこの週期の長さを不変の大きさと考えたことはけっしてなく、いつも、一つの漸減する大きな (une grandeur décroissante) と考えていました。しかし、それがその減少運動のかくも明瞭な徴候を呈していることは、かくべつ喜ばしいことです。これこそ、資本制世界の寿命にひとつ一つの悪い前兆です」(Briefe über „Das Kapital“, S. 225, 岡崎訳、下巻、二七〇—二七二ページ、傍点—三宅)。この手

紙はさきのフランス語版への書加えと同じ関心をもって書かれており、当時マルクスが週期のこの「短縮」に大きな注意を払っていたことを知ることができる。

ところで、この「週期の短縮」というのは一体なにを指して「短縮」といつているのであろうか。その前にここで一八七五年の状況について見ておこう。

既述のようにイギリスも一八七三年に恐慌に見舞われたが、十一月の危機においても「一般的な金融パニック」は生じなかった。しかしその回復は緩慢であって、一八七四年は事業は沈滞のうちにすぎた。金融市場は比較的平静で、イングランド銀行の割引率（公定歩合）は、年の末近く十一月十六日に五%、同月三十日に六%に引上げられたが、これは通常の秋期における金流出に加えて、ドイツで新しい金貨の鑄造がありこれと関連して金がドイツに流出したためであって、これを除いては四%—二%の間を動いていた。「一八七五年初頭、事態はすべてにわたってより良い観を呈していた。一八七四年末の六%レートは、大陸およびその他から金を引き寄せ、イングランド銀行の準備をふたたびみたす効果をもった。貨幣（money）は豊富（plentiful）となり、そしてその状態が保たれた」（Gilbert: *ibid.* vol. I, p. 357, 傍点—三宅）。しかし状況は一八七五年にも好転せず、かえってふたたび恐慌状態となった。まず南アメリカでの事業悪化にかんれんして一連の商社の倒産が生じたが、これがいく分納ったところで、三月末に今度はいくつかの倒産が鉄鋼業において生じ、四—五月南ウェールズその他の鉄鋼地帯でのストライキ、さらにインドおよびシナ商会の状態悪化、と事情は一層悪くなり、そして五月十八日ロンドンの小銀行 City and County Bank が支払停止に陥った。「この倒産は、これと密接な関係ある先を除いてなら直接の重要性がないものであったが、すでに燃え上りつつあった不信と不安との焰を煽ることを助長し、当時における商業上の諸業務の深刻な様相をより強

めた」(Gilbart: *ibid.* p. 359)。まもなく大鉄鋼商会 *Aberdare Iron Company* の倒産が起き、これに続いて関係商社ならびにこれらの手形を大量に取扱っていたビル・ブローカー *Sanderson and Co.* 等の支払停止が生じた。しかし、「こういった一連の倒産は、想像されたほどには悪影響を及ぼさなかった。というのはそれらの負債はほとんどすべて為替手形をとっており、この手形はサンダースン商会その他を通して、諸銀行の手に保有されていたのであるが、これら銀行はその損失によく堪えることができたからである」(Gilbart: *ibid.* p. 359—60)。だが状況は「大きな商業的パニックの前夜にある」ことを思わせた。そしてつぎの波は、——「これにつづいたパニック (panic) ——あるいは恐慌 (crisis) といった方がより正しいかもしれない——を直接にひき起したのは、六月十五日の午後、マンチェスターとロンドンとに店をもつ東インド商会 *Alexander Collie and Co.* が推定三百万ポンドに及ぶ負債を擁して倒産したという報道であった」(Gilbart: *ibid.* p. 360)。そのつぎの週には、このコリー商会の手形関係先の約三十の商会が倒産した。アバデア商会のさいのサンダースン商会のように、今度はビル・ブローカー *Young, Borthwick and Co.* が支払不能に陥った。前者と同様に、コリーは多くの融通手形を振出し、これをヤング商会に持込み、ヤング商会はこれを銀行業者のところで割引に附し、あるいはこれを担保にして貸付けを受けていたのであるが、コリーが破産し、ヤング商会はこれらの手形を銀行業者たちの手から引取ることができなかったからである。したがってまた、今度の場合にも損失は主として銀行業者の上にかかってきたが、銀行の破綻は起こらなかった。「さいわいにこの恐慌はつぎの点で一八六六年のパニックのさいとちがっていた、すなわち、このたびは貨幣 (money) はありあまっており (*superabundant*)、イングリランド銀行のレートはわずか三 $\frac{1}{2}$ %であった。そして、よい商会は、なんらの困難なく、かれらの望むあらゆる融通を手に入れることができた」(Gilbart: *ibid.* p. 361)。小さな商会にたいしては銀行業者は警

戒して貸出を手控えていたので、その後しばらく二流商会の間で倒産が続いたが、「貨幣の過多 (plethora of money) のおかげで、銀行業者やその他が抱いていたいく分過大であった危懼は、かれらの手にしている手段からできるだけ利潤を取得したいという欲求にとって代わられた。かれらはまもなくふたたび割引をはじめ、かくて以前存していた危懼は大幅に静まった」(Gilbart: *ibid.* p. 362)。市場の利子率は一層低落してゆき、イングランド銀行もこれに追隨して七月八日に三%に下げ、七月二十九日には二 $\frac{1}{2}$ %、八月十二日にはさらに二%に下げた。しかし同行への割引申込みはなく、八月、九月には金融市場はまったく閑散で、市中の最高レートが1%となるにいたった。そして秋から年末になるにつれて金融市場はふたたび普通の状態になっていった。かくして一八七五年の恐慌は「一連の恐慌のシリーズ (a series of crises)」の形をとり、「そのクライマックスは六月におけるコリーの破綻であった」(Gilbart: *ibid.* p. 363)。

以上一八七五年恐慌についてギルバートの書——といってもJ・W・ギルバートは一八六三年八月に死んでいるのであるから、右の部分は後年の編集者の手になったものであるが——によって見た。普通、一八七三年の恐慌、一八七八年の恐慌、というが、一八七五年の恐慌とはいわれていないように見受けられるのであるが、ギルバートのこの書ではどういふわけかこの章の表題も「一八七五年および一八七八年の恐慌」とし——このなかで一八七三年恐慌についても述べている——、また「近年に生じた主要な逼迫は、一八二五年、一八三六年、一八三九年、一八四七年、一八五七年、一八六六年、一八七五年、および一八七八年のそれであった」(Gilbart: *ibid.* vol. I, p. 302)というように、「一八七五年」をとり出し、したがってまたかなりくわしく述べている。右に見たように一八七五年は、相ついで破産が起きたが、金融逼迫は生じなかった。くり返しこの点を右書で見ておくと、——「一八七五年および一八七

八年の恐慌は、そのおこりは、一八五七年および一八六六年のそれとはきわめて異なる原因からきていた。五七年、六六年には、投機がきわめて危険な程度にまで進められていたのであり、そしてその結果、貨幣は乏乏し (*money was scarce*)、イングランド銀行の準備はきわめてすくなかった。しかし一八七五年および一八七八年の恐慌のさいには、貨幣は豊富であり (*money was abundant*)、イングランド銀行はあらゆる需要に応じることができた。これらの年の準備の平均は、五七年、六六年のそれのほとんど二倍であった」(Gilbart: *ibid.* vol. II, p. 345)。

話を元に戻すと、マルクスが上掲ラヴロフ宛に「商業恐慌は拡がりつつあります」と書いたのは一八七五年六月十八日であるから、右で見ると丁度コリー商会が六月十五日に破綻した三日後に当る。そしてこのときにも「決定的な *krach*」は生じなかったのであるが、それはそれとして、さきの「週期の短縮」というのは、一八六六年について一八七三年にさきに見たような恐慌状態がきたということを指しているのか、または一八六六年—一八七五年を指しているのか、あるいは一八七三年—一八七五年を指しているのか、ということが一応考えられるが、「週期の短縮」であるから一八七三年—七五年は、——一八七三年にさきのような恐慌状態となり、ふたたび七五年に右に見たような状態となり、そこで「減少運動のかくも明瞭な徴候を呈していることは」云々といっているのではあるが——、問題とならないであろう。また書いているのは一八七五年であるが、(+)のところでも見たように、マルクスは一八七三年に勃発した恐慌がなお継続していて、「頂点」に向う運動をとっていると見ていたのであるから、一八六六年—七五年を指しているのではないことも明らかといえよう。したがって、前掲フランス語版への書加えで、いままでは「十年または十一年」であったが「循環の週期はしだいに短くなるであろう」としているのとともに、これも、一八六六年について七年目の一八七三年に恐慌に入ったということを指していっているものと見て、まちがいないであろう。

一八六六年のさいイギリス銀行条例の停止にいたったのは五月十一日であつた。今度はまだこういう *krach* には立ちいたっていない、だがすでに一八七三年に恐慌に入つた、そして今日一八七五年もこれの繼續で「頂点」に向つているのだ、こう考へて、一八六六年—七三年を「短縮」としたのであらう。

なお、さきに戻つて、はじめに掲げたフランス語版への書加へは、これがドイツ語第三版、第四版に採り入れられていない、ということは十分に注意を要することであつて、前記のようにここについてマルクスの指示がなかつたものと推測される。したがつてこれを取扱うには、十分な慎重さが必要であると見られるべきであらう。

(8) このフランス語版への書加へはインスティトゥート版『資本論』第三卷第二分冊巻末に「第一巻への補遺」として附加されているが、戦後のディッツ新版でも——これを第一巻末に移して——そのまま、同じく「第一巻への補遺」として附加されている。フランス語版をとり入れて編集されている『資本論』のカウツキー版を念のため見てみると、同版ではここに——例のごとくなんの編集者註も入れないで——このフランス語版での書加へをドイツ語に訳して、本文中に挿入している(Bd. I, S. 571)。いまフランス語版は対照する便がないのであるが、この二つのドイツ語訳をくらべてみると、内容的には両者間に大差はないが、カウツキー訳の方がややすらすらとしてゐる。本稿ではさし当り、インスティトゥート版の訳の方にしたがつておいた。

なお、インスティトゥート版の編集者註では、「フランス語版(パリ、一八七三年)にはこの箇所(二八〇ページ)に過ぎのようなマルクスの挿入が見出される」と書かれてゐるが、この「一八七三年」は誤りと思われる。フランス語版が前記のように一八七二年から七五年にかけて分冊の形で刊行されたことから見て、この一八七三年はおかしいが、かりにこの一八七三年が問題のこの箇所が刊行された時を指しているとしても、この章(ドイツ語版での第二十三章)は第一巻の終りの方であり、また、たとえばマルクス自身一八七五年二月十一日付ラヴロフ宛の手紙のなかでつぎのようにいつてゐる、——「フランス語版の方にはたくさんの変更と追補とが含まれてゐます。……しかし、フランス語版のなかのもつとも重要な変更は、まだ出てゐない部分に、すなわち、蓄積にかんする諸章のうちにあるのです」(Briefe über „Das Kapital“, S. 223—4, 岡崎訳、

下巻、二六九ページ、傍点—三宅）。ドイツ語版での右第二十三章「資本制蓄積の一般的法則」（フランス語版では第二十五章である）の章が、この「蓄積にかんする諸章」に属していたであらうことはいうまでもないであらう。つまり、一八七五年のはじめにはまだこの部分は刊行されていなかったのである。フランス語分冊本を見るに越したことはないが、右から見て、さきの日付の「一八七三年」は誤りであり、一八七五年とされねばならぬとして、まちがいはないであらう。なお、エンゲルスも『資本論』第三版への序言のなかで（英語版への序言のなかでもくり返して）、フランス語版の刊行を「一八七三年」と記しているが（Bd. I, S. 21, S. 25）これについてはすでにカウツキーが、カウツキー版の編集者序言のなかで、「ついでにいうと、この日付は『フランス語版へのマルクスの「あとがき」の一八七五年四月二十八日という日付』上に引用したエンゲルスの序文〔第三版への序言〕のなかでフランス語訳の刊行年を一八七三年と記しているのが、過失または誤植によるものであることを、証明している」（Bd. I, S. XV）といている。フランス語版を一八七三年とするのはこういった曰くつきのことであるが、——すでにカウツキー版がこう指摘しているのにインスティトゥート版ではこれを黙殺し、しかもそれに加えてその M・E・L 研究所の序文でも「一八七三年のフランス語版」（Bd. I, S. 23*）と記しているのは、いささか不審であるが——、いままたこの同じ誤りがインスティトゥート版でもくり返されているわけである。以上、備忘的にここに附言しておく。

(6) Money is plentiful, money is scarce といったいい方については『資本論』第三部第五編、インスティトゥート版五七四—五ページを参照されたい。この money というのは普通の意味での貨幣ではない。

(10) 「crisis および panic」という語は同意語として任意に使われているが、——ギルバートは第三の語として pressure という語を用いている——、これは本当は、二つのまったくちがった事柄を指しているものである。……パニックはクライシスの acute stage である。あらゆるパニックはクライシスの存在を前提とするが、すべてのクライシスはパニックをひき起こすというその逆の命題は、一八二五年、一八四七年、一八五七年、一八六六年の場合にはいかにもそうであったかもしれないが、現代においてはたしかに真ではないであらう。一八六六年以来、われわれは五つのクライシスの時期——一八七三年、一八七八年、一八九〇年、一九〇七年、一九一四年という——をもったが、これらの一つといえどもパニックに発展しなかった」（E. T. Powell: The Evolution of the Money Market, 1385—1915, p. 324）。一つの参考までに。

四

さきに(一)のところで一八七八年十一月十五日付のダニエルソン宛の手紙を見たが、以下の三つの手紙はこれと直接結びつけて考察されるべきものである。いずれも同じくダニエルソン宛のものである。

第一、——一八七九年四月十日付ダニエルソン宛の手紙(Briefe über „Das Kapital“, S. 241—8, 岡崎訳、下巻、二八九—九二ページ)。「第一に、現在のイギリスの産業恐慌がその頂点(its climax)に達しないうちには、私はいかなる事情があっても第二巻を出版したくありません。¹¹⁾現象(phenomena)はこのたびは特異であって(singular)、多くの点で以前そうであつたのとはちがっています。このことは「特異であるということ」つまりのような事実からしても——モディファイしているその他の事情はまったく措くとしても——、すなわち、従来、イギリスの恐慌が、合衆国、南アメリカ、ドイツ、オーストリア、等々におけるすさまじい、そしてもうすでに五年も続いているような恐慌によって先立たれたことはいまだかつてないことであつた、という事実からしても容易に明らかであります。／＼したがって、事態が完了するまで現在のなりゆきを注視することが必要であり、しかるのちにはじめて、この事態を『生産的に』つまり『理論的に』、『消費する』ことができるのです」(傍点および「」内—三宅)。

(二)のところで見たように、マルクスが、一八七三年一月に「一般的恐慌」が「まだ前段階にあるとはいえふたたび進行中」だと告げ、一八七五年四月に恐慌は「その頂点に向っている」とし、イギリスが「中心的爆発の座」となることを予測していたこと、また一八七八年十一月に「イギリスの恐慌はついに最近数週の間には勃発しました」と記していたことを想起されたい。なお、前記のように、この一八七八年十一月にマルクスがこのようにいったのは、シテ

イ・オヴ・グラスゴー・バンクの倒産を見ていつていたものと思われるが、ギルバートの書では一八七九年二月頃をもって「一八七八年の恐慌はすぎ去ったというるのであろう。コンフィデンスはこのあとすぐに十分に回復した」（前掲）と記している。しかし一般の商工業界は七九年により悪かった。そしてマルクスはこの一八七九年四月十日付の手紙においてまだ「すぎ去った」とは見ていなく、「特異」ななりゆきを注視するとともに、なお「頂点」の到来を待っていたのである。

(11) これは、『資本論』第二巻（マルクスは、『資本論』第一巻第一版への序言末尾に記していたように、現行第二巻、第三巻を、つまり第二部、第三部を第二巻として刊行する予定でいた）の刊行遅延の理由を挙げているその「第一」として記しているのであって、「第二」としては「ロシアだけでなく合衆国その他からも私が受取った膨大な材料が、さいわいにも、出版のために研究に結末をつけないでそれをさらに続行する『口実 (pretext)』を私に与えてくれます」とし、「第三」としては医師が「労働日」を短縮するように警告していることを挙げている。

エンゲルスは、ダニエルソンから、ダニエルソン宛のマルクスの手紙の抜書を受けとった時返事として書いた後掲一八八五年十一月十三日付の手紙のなかで、「私はこれらを悲しい微笑をもってせずに読むことはできませんでした。ああ、著作が完成しなかったことにたいするこういった言い訳は、われわれのよく聞かされたものです！ かれの健康状態のためこの仕事を進めることができなかったときはいつでも、そのことがかれの心を非常に苦しめました。それで、かれはこの著作をいま完結せしめてはならぬというなんらかの理論的な言い訳を見出したときにはのみ、喜んでいました。これらの論法はみな、かれが当時私にたいして用いたものです。これらのことはかれらの良心を鎮めるらしく見えました」と述べている (Ausewähle Briefe, S. 463—6, 改造社全集版訳、第二十一巻、一五八ページ)。このように、現在の恐慌がおわるまでは『資本論』「第二巻」を出版したくないという上掲のマルクスの言葉は、エンゲルスによれば、病氣のため著作を完成しえないことを苦にし、その言い訳として書かれている、と見られているのであるが、そして事実、多分に言い訳として述べられているのであるが、しかしこれはたんに形式的な言い訳としてはかり述べていたのではないであろう、と見受けられる。そのことは

たとえばまた約一年後のつぎの手紙からも窺われえよう、——『資本論』の第二の部分は現在の状態ではドイツで出版できませんが、このことは、まさに今日ある種の経済的現象があらたな発展段階に入り、したがってあらたな取扱ひ(*neue Bearbeitung*)を要求しているというかぎりでは、私にとつてまったく好都合です」(一八八〇年六月二十七日付ドメラニーヴェンフィス *Domela-Nieuwenhuis* 宛のマルクスの手紙 *Briefe über „Das Kapital“, S. 253*, 岡崎訳、下巻、二九七ページ)。ドイツでは一八七八年にビルマルクによつて社会主義鎮圧法が公布された。右でドイツの「現在の状態」といつている所以。

以下は同じ手紙の前掲につづく記述である。——「現在の状態の特異な様相の一つは、こうです。ご存じのように、スコットランドと若干のイングランドの諸州、主として西部(コーンウォリスやウェールズ)とで銀行の倒産が起きました。しかし、金融市場の真の中心——連合王国だけでなく、世界の——たるロンドン、今日までほとんど影響をうけていません。反対に、わずかな例外は別として、大きな株式銀行、たとえばイングランド銀行のときは、依然として一般的衰弱から儲けをえてばかりいます。そしてこの衰弱がどんなものであるかは、もう二度とよい時代は見れない、というイギリスの商工業の連中たちのまったくの絶望から判断できるでしょう。私は一八五七年にも一八六六年にもロンドンにいましたが、こんなことは見たことがなく、これに類似の精神動揺を目撃したことはありません! / ロンドンの金融市場に好都合な事情の一つは、疑いもなく、フランス銀行の状態です。これは、両国間の付き合ひの近時の発展以来、イングランド銀行にとって一救済所(*a succoursale*)になっています。フランス銀行は、その銀行券の兌換性がまだ回復されていないので、大量の地金を保有しており、ロンドンの株式取引所にすこしでも動揺の兆があると、一時的に減価した有価証券を買うためにフランスの貨幣(*French money*)が流入します。もし、昨年の秋にフランスの貨幣が突然引揚げられていたら、イングランド銀行はおそらく、銀行条例の停止という、緊急時における最後の救済手段に逃げ込まねばならなかったでしょう。そしてそうした場合、われわれは金融的崩壊

(monetary crash) に、出合ったわけでした。——他面では、合衆国で兌換の回復が平静に行われたことは、イングラ

ンド銀行の資金 (resources) にかかるその方面からの負担をすべてとり除きました。しかし、これまでロンドン金融市場内の爆発 (explosion) を妨げることに主として寄与していたものは、ランカシャーやその他の工業地区 (西部の鉱業地区を除く) の諸銀行が外観上平静な状態にあったことです。といっても、これらの銀行が、製造業者たちの利益のない取引にたいして、手形を割引いたりそれに前貸して、かれらの資金の大きな部分を投下しただけでなく、たとえばオールドハムなどで、かれらの資本の一大部分を新工場の設立に固定させた、ということとはまったくたしかです。

それと同時に、主として綿製品のストックが、それらが委託販売の形で送られるアジア (主としてインド) においてだけでなく、マンチェスター、等々でも、日々増加しています。こういう事態が、いかにして、一つの、一般的崩壊 (a general crash) ——製造業者たちの間から地方諸銀行に波及し、ロンドン金融市場に直接に反作用するところの——なしにすぎ去りうるか、——ということは予見することが困難です。……この恐慌のなりゆきがいかにように進展しようとも、——それを細目にわたって観察することは資本制生産の研究者や職業的理論家にとってきわめて重要である

とはいえ——、それは以前の諸恐慌と同じように、にすぎ去るでしょう、(it will pass over)。そして、繁栄、等々の種々の局面を持ったあらたな『産業循環』を開始するでしょう。——だが、この『外観上』堅固なイギリス社会の外被

の下には、もう一つの恐慌——農業恐慌が潜伏しています。それはイギリスの社会構造に重大な変化をひきおこすでしょう。この問題にはまた別の機会にたち戻ることがあるでしょう。いまこれを論じるのはあまりゆきすぎのようです」(傍点—三宅)。

右のはじめにスコットランドや西部イングランドでの銀行の倒産といっているのは、既述の一八七八年のシティ・

オヴ・グラスゴー・バンクやウェスト・オヴ・イングランド・バンク等の倒産を指しているものであらう。そのつきで、たとえばイングランド銀行は儲けている (profited) といっているが、金融市場がつまってくるにつれイングランド銀行にたいする貸出需要は多くなり、かつ利子率が引上げられるので、同行の収益は平時にくらべて増大する。當時についていうと、一八七七年八年度 (年度がわり八月) には割引収益四万四千ポンド、貸付収益八万九千ポンドであつたが、一八七八―九年度にはそれぞれ十万七千ポンド、十八万九千ポンドと激増した。そしてつぎの一八七九―八〇年度にはふたたびそれぞれ、三万三千ポンド、十一万三千ポンドに減っている、――いずれもロンドン本店のみの分 (Clapham: The Bank of England, vol. II, pp. 434-5. なお本誌前号の拙稿「一八四七年恐慌」四一ページ参照)。しかし、イングランド銀行は金融逼迫期、したがって恐慌期には、銀行条例を停止した従来の時においてもつねに収益は増大しているのであるから、他の市中銀行を例にとればともかくとして、イングランド銀行を例にとつたのでは、べつにこの場合に「特異な」ことではない、といわれるべきであらう。そのつぎでマルクスのいっている「もう二度とよい時代は見れない、というイギリスの商工業の連中たちのまつたくの絶望」というのは、一八七三年以来一向に事業活況の状態とならず不振を続け、しかも断続的に恐慌状態が現出し、またまた一八七八―九年度の悪化となつた、といったことによるものであらう。「卸売物価は真逆さまに低落してゆき、そして一八七九年には取引不振とひどい収穫とが結びついて、十九世紀後半のうち経済的最悪の年を現出した」(Clapham: *ibid.* p. 306)。なお、シティ・オヴ・グラスゴー・バンクは一八五七年も支払停止に陥つた銀行で、評判のよくなかつた銀行であつたとされているが、同行は無限責任の株式銀行であつて、ためにこの破綻はきわめて深刻なショックを与えた。そして以来無限責任の株主をもつ銀行は急速に有限責任に改組され、有限責任の原則が樹立されることとなつた。「グラスゴーの悲劇は、インゲ

ランド銀行にはなんら重要な直接的影響を及ぼさなかったが、イギリスの銀行業の組織の上に即刻影響を及ぼした」(Clapham: *ibid.* p. 311)。イングランド銀行の公定歩合は、前記の一八七五年以来、短期間五%を二度出したほかは、二・四%の間を上下していたが、一八七八年八月十二日に四%から五%に上げ、十月十四日に——つまりグラスゴーバンクの破綻をうけて——六%に上げた。¹²⁾しかし十一月二十一日には五%に戻し、一八七九年一月十六日には四%、ついで同月三十日には三%と下げてゆき、そして四月には二%にまで下げてこのレートで一八七九年のほとんど残りを経過した(Clapham: *ibid.* pp. 430—1)。これに見られるように、一八七八年秋の銀行の倒産も金融市場には大きな影響を与えず、一八七九年も、一方における事業沈滞、他方における「貨幣」豊富、という状態であったのである。

マルクスは前掲のように「フランスの貨幣」が流入したことを強調している。このことは、すぐあとに掲げる二つの手紙でも大いに強調されている。一八七三年十一月のときも、一八七四年末にも、イングランド銀行のレート引上げが「大陸」その他からの金流入をもたらし、同行の金属準備を豊富ならしめた、ということを経ルバートの書で記していることはすでに見た。しかし、いまこの一八七八—九九年の場合にはこういう流入があったことを記しているものは、このマルクスの記述以外には、手元にある書では見当らない。ギルバートの書で前掲のように、一八七五年、七八年にはイングランド銀行の準備は一八五七年、六六年のその「ほとんど二倍」であった、と記していることを顧慮すると、一八七八—九九年に「流入」が「救援」というほどの意味をもったかどうか、やや不審に感じられるのであるが、しかし「突然引揚げられていたら」イングランド銀行としてはかなり困ったことになったであろう。¹³⁾マルクスはこの「フランス貨幣」の動きを、一八七八—九九年恐慌に「金融的崩壊」が来なかったことの「決定的なモメントの一つ」(後掲)としているのであり、いいかえれば、一八七三年以来の長い「恐慌」が従来のようなロンドン金融市場

のパニック、イングランド銀行条例の停止という「頂点」——マルクスが一八七三年この方待ち受けていたところの「頂点」——に達しなかったことの大きな理由と見ているのであって、したがってこの「フランス貨幣」の動きがどのようなであったか、それがイングランド銀行の金属準備にどのように作用したか、ということを実際について検証してみたいと思うのであるが、遺憾ながいまのところはつきりしない。

(12) イングランド銀行がこの一八七八年十月に六%を唱えたのち、つぎにふたたびこの高きまで公定歩合を上げたのは、一八八二年一月三十日であった。同年二月はじめパリのユニオン・ジェネラル (Union générale) が支払停止をするにいたったが、「金および外国為替の上にそれが反射してくることに對抗して、イングランド銀行はふたたび、予防的に六%を唱えることによって自己を防衛した」(Clapham: The Economic History of Modern Britain, vol. II, p. 384)。

(13) イングランド銀行の金属準備が増加すれば、一八四四年の銀行条例の規定にしたがつて同行の銀行券発行力が増大する。したがって流通銀行券の数量が変わらないとすると、同行銀行部の保有銀行券が、つまり銀行部の準備金が増大する。いいかえれば同行の貸付可能な貨幣資本が増大する。これに反し、金がイングランド銀行から流出すると、銀行条例によって同行は金属準備額をこえては千四百万ポンドしか銀行券を発行しえなかったから、流通銀行券の数量が変わらないとすると、銀行部の保有銀行券、つまり銀行部の準備金が増大する。したがって、たとえば流通銀行券が二千万ポンドとすると、金属準備が減少して六百ポンドに近づくにすぎない、銀行部の準備金はゼロに近づくことになり、同行は貸出需要に応じえなくなる。したがって銀行条例を停止して、その銀行券発行を金属準備の制限から解放することが必要となる。

第二——一八八〇年九月十二日付ダニエルソン宛の手紙 (Die Briefe von Karl Marx und Friedrich Engels an Danielson, herausgegeben von Kurt Mandelbaum, S. 24, 改造社全集版訳、第二十一巻、一四三ページ)。「現下の恐慌は、その期間、広さ、強度にかんしていえば、イギリスがかつて経験したもののうち最大のもの (die größte) ですが、しかしスコットランドやイングランドの若干の地方銀行は倒産したのにかかわらず、ロンドンで金融的崩壊——この崩壊¹⁴⁾

は、イギリスにおける従来の週期的恐慌を飾ったものでした (krönte) —— が欠けていることで目立っています。このまったく異常な事実—— 正當にも金融パニック (Geldpanik) と呼ばれているものの欠如—— は、諸事情の複合に帰せられるべきものですが、それをいま分析するのはあまりゆきすぎることになります。だが、もっとも決定的なモメントの一つは、ともかく、つぎのこと、すなわち、一八七九年の強い金屬流出が、いちじるしい程度において、フランス銀行とドイツ・ライヒスバンクとの支持 (Unterstützung) によって相殺された、ということでした。他方、合衆国におけるにわかな回復—— 一八七九年春以来の—— が *deus ex machina* のように作用しました。／＼農業恐慌にかんしていうならば、それは發展し、強さを増し、漸次頂点に達し、もって、商業的および工業的恐慌の循環とはまったく独立に、土地所有關係に完全な革命をもたらすでしょう。……」(傍点—三宅)。

(14) この手紙は *Briefe über „Das Kapital“* にも *Ausgewählte Briefe* にも収録されていない。したがってマルクスの原文はわからないのであるが、上で「金融的崩壊」としておいたことについて一言。これは、マンデルバウムのドイツ語訳書では *Börsenkrach* となっている。これをそのままとると、こゝは、取引所のパニック、ガラということになるが、このドイツ語訳書では前掲一八七九年四月十日付の手紙で *monetary crash* と書いてあるところは *Krach auf dem Geldmarkt* と訳しているが、この一八八〇年九月十二日付手紙のすぐつぎに収められている「一八八二年二月十九日付の手紙(次掲)」で *financial crash* と書いてあるところは *Börsenkrach* と訳している。また一八八五年十一月十三日付ダニエルソン宛のエンゲルスの手紙(一部前掲) なおこの手紙についてはのちにまた見る)で *financial crash* と書いてあるところでも——これはマルクスがこのように *financial crash* について記しているのぞ、エンゲルスがこのマルクスの手紙を見てこう書いている、と見受けられるものである——、やはり *Börsenkrach* と訳している。したがって上記のところも *Börsenkrach* と訳されている。この言葉は *financial crash* であろうと判断して差つかえないと考えられる。内容の方からいって、こゝは *Börsenkrach* ではなく、*financial crash* であろうと語は *monetary crash* と同じ

意味で使われているものと思われる。なお、*Briefe über „Das Kapital“* 及び *Ausgewählte Briefe* でもダニエルソン宛の手紙のドイツ語訳はマンデルバウムの編書と大体において同じであると前に記しておいたが、右の点についてもマンデルバウムのそれとまったく同じに誤訳されている。

第三、——一八八一年二月十九日付ダニエルソン宛の手紙 (*Briefe über „Das Kapital“, S. 257—60, 岡崎訳、下巻、三〇三—四ページ*)。「以前あなたにつきのように書いたことがありました。もし、イギリスが経験している産業および商業の大恐慌がロンドンでの金融的崩壊 (*financial crash*) において頂点に達することなしにすぎ去ってしまう (*went over*) ならば、この例外的 (*exceptional*) 現象はひとりフランス貨幣に因る (*only due to*) ものだ、と。これはいまではイギリスの実業家たちによっても、看取され認められています。すなわち『スタチスト』(一八八一年一月二十九日) はこういっています、——『過去何ヵ年間金融市場がかような潤沢 (*easy*) であったのは、ただ偶然によるものである。フランス銀行は秋のはじめに、その金地金保有高が三千万ポンドから二千二百万ポンドに減少することを黙認した。……昨春秋はたしかに、まことに危いところであった (*there was a very narrow escape*)』(一)。

第二の一八八〇年九月の手紙ではまだ「現下の恐慌 (*die augenblickliche Krise*)」と呼んでいたが、第三の一八八一年二月の手紙ではもう恐慌は「すぎ去った」ものとして述べていると見受けられることは、注意をひくことである。のちに見るが、エンゲルスは一八八五年十一月十三日付ダニエルソン宛の手紙でつぎのようにいっている、——「著者『マルクスのこと』がかれの手紙でいつている恐慌は實際例外的なものでした。事実、それはいまだに続いており、(*it continues still*)、全ヨーロッパおよびアメリカが今日までそれに悩まされています」(傍点—三宅)。このマルクスの見方とエンゲルスの見方との間には、なお明瞭な形においてではないが、若干差異があるように感知される。

る。その他のエンゲルスの種々の記述について見てゆくと、こういったエンゲルスの見解はよりはっきりした形をとってうつし出されてくるのであるが、このところは、そういうエンゲルスの見方とマルクスのそれとを対照させる上での一接点をなすものであって、その上からこの右の点はとくに注意するべきである、と見られる。

また、上に見てきたように、マルクスは「金融的崩壊」という「頂点」が来なかったことを注目し、そこに大きな関心を寄せているのであるが、エンゲルスの方では、世界市場の状態が変化したという点に分析の重点が置かれている。マルクスおよびエンゲルスによって当時恐慌について書き残されているものを見ると、このことと、右の点とが両者の記述のそれぞれの大きな特徴をなしている、といつてよい。

マルクスは一八八一年十二月十三日付ダニエルソン宛の手紙のなかでつぎのように書いている、——「まず第一に私はふたたび健康にならねばなりません、つぎには第二巻をできるだけはやく完成したいと思っています（それがドイツ外で出版せざるをえないとしても）。私は、今日では、それを妻にささげるために「この十二月二日に夫人死去」という特殊の理由からも、それを仕上げたいと思っています」（Die Briefe, herausgegeben von K. Mandelbaum, S. 30, 改造社全集版訳、第二十一巻、一四九ページ。なお、前掲の一八七九年四月十日付ダニエルソン宛の手紙のはじめの部分、および一八八〇年六月二十七日付ドメラニーヴェンフィス宛の手紙をこれと読み合わせられたい）。このように「第二巻」を書上げる志を抱きつつ、しかしその後健康を回復しないまま一八八三年三月十四日に死去した。さきの一八八一年の手紙との間には二カ年あるが、そして一八八二年にはふたたび恐慌が起きているのであるが、この間恐慌について記しているマルクスの手紙類は見当らない（手紙自体が非常にすくない）。したがって、マルクスの部分はこれで終え、つぎにエンゲルスの方を見ることがする。